中外製薬 会社説明会

中外製薬株式会社
取締役 上席執行役員 CFO
板垣 利明

2023年11月14日（収録）

重要な注意事項

本プレゼンテーションには、中外製薬の事業及び将来に関する見通しが含まれていますが、いずれも、既存の情報や様々な動向についての中外製薬による現時点での分析を反映しています。実際の業績は、事業に及ぼすリスクや不確定な事柄により現在の見通しと異なることもあります。

医薬品（開発品を含む）に関する情報が含まれていますが、それらは宣伝・広告や医学的なアドバイスを目的とするものではありません。

会社概要

がん・バイオに強みを持つ、研究開発型製薬企業

医療用医薬品メーカーとして日本トップクラス

売上収益 1兆1,680億円　営業利益 4,517億円　従業員数7,771名（2022年度決算Coreベース）

国内がん領域で売上シェア 第1位*（2022年度決算ベース）

国内抗体医薬品市場で売上シェア第1位*（2022年度決算ベース）

ユニークなビジネスモデル

戦略パートナーであるロシュ社が株式59.89%を保有

独立した上場企業として自主的経営を実行

独自のサイエンス・創薬技術力

国産初の抗体医薬品を創製。抗体・中分子等で世界最先端の技術力

* Copyright © 2023 IQVIA. 出典：IQVIA 医薬品市場統計2022年暦月（1月-12月）をもとに作成　無断転載禁止　市場の定義は中外製薬による

創業から大切にしてきたこと

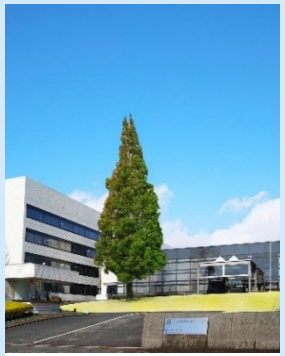
創業時の「患者さんと人々の健康に貢献する」という意志を受け継ぎながら
社会や患者さんの期待・要望の変化に応じてビジネスモデルを変革してきた

2002年 診断薬事業
2004年 一般用医薬品事業
・殺虫剤製造事業を譲渡し、
医療用医薬品に特化

1925

関東大震災後の薬不足を憂いて創業

1960s



医療用医薬へのシフト

1980s

バイオ医薬への注力

2002

ロシュと戦略的アライアンス開始

現在

2022年度過去最高の決算を達成

ロシュとは

医薬品事業と診断薬事業を営むグローバル企業グループ

設立	1896年10月
売上高	8兆7,086億円*
営業利益	3兆513億円*
従業員数	101,465人
本社	スイス、バーゼル
拠点の数	約150カ国

2022年12月期実績　　*1CHF=137.6円で算出

自主独立経営を行うビジネスモデル、ロシュとの戦略的提携

- 中外製品をグローバル市場で最大化
- 豊富なロシュ製品を日本で展開

- ロシュ製品を日本市場で最大化
- 革新的な中外創製品をグローバルで展開

自社創製品

革新的・挑戦的な創薬に特化

↓

ロシュへの導出により
グローバル開発・販売を加速

ロシュ導入品

有力新薬候補を
日本市場で独占的に開発・販売

↓

国内事業で安定的な
収益を確保

戦略的アライアンスの意義

ネットワーク経営によるWIN-WINの提携

ロシュのWIN

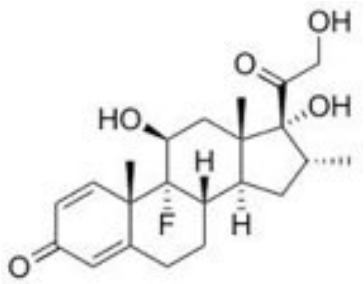
- 中外を**連結対象**（株を過半数保有）
- 日本におけるロシュの**プレゼンス強化**（日本ロシュは、当時40位前後）
- 中外品の世界（日韓台を除く）での**独占的販売権**の獲得

中外のWIN

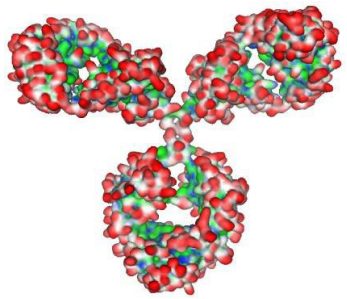
- 中外製薬として**上場維持**
- **自主経営**を維持
- ロシュ品の日本での**独占的販売権**の獲得
- ロシュの開発・販売網を通じた**グローバル市場へアクセス**
- **R&Dへの経営資源集中**

低分子から抗体、さらに次世代型抗体へ

低分子医薬品

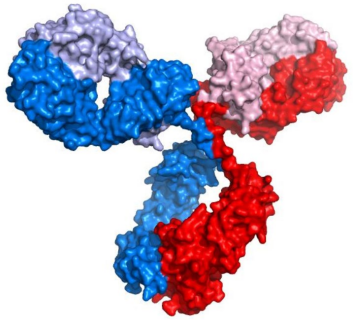


抗体医薬品



標的に結合して、
その作用を阻害する

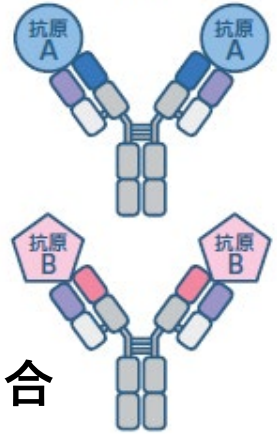
**次世代型
抗体医薬品**



抗体エンジニアリング技術を用いることで、従来の抗体では不可能であったことを可能にした次世代抗体

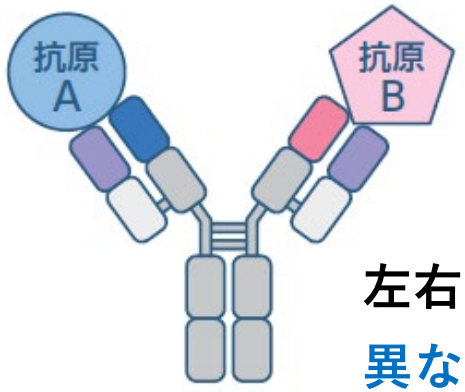
バイスペシフィック抗体

通常の抗体の構造

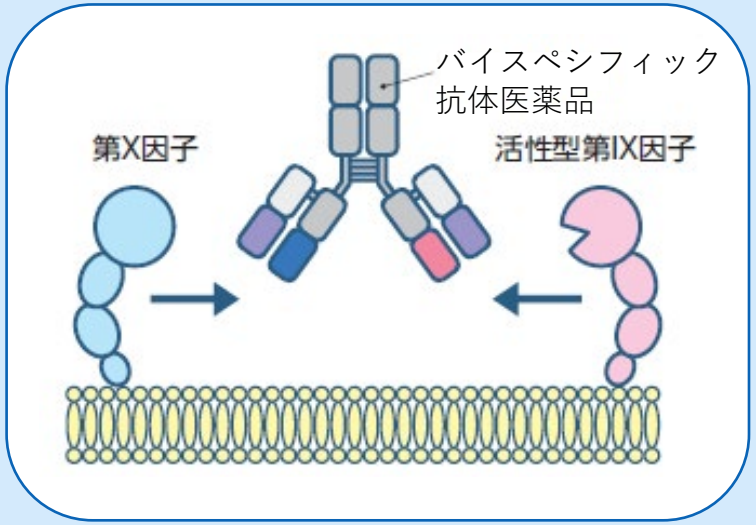


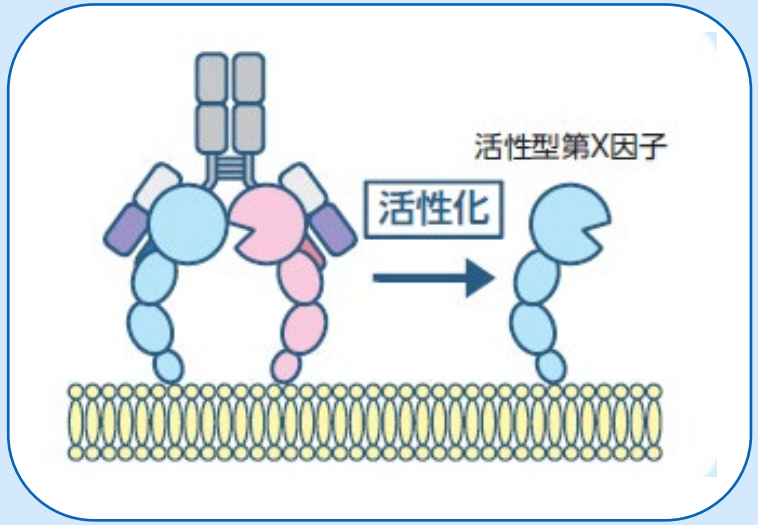
左右の腕が、
同じ抗原と結合

バイスペシフィック抗体



左右の腕が、
異なる抗原と結合





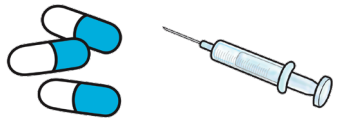
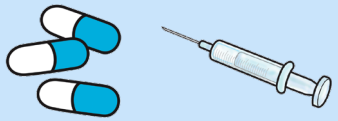
バイスペシフィック抗体医薬品が、第IX因子と第Ｘ因子を
くっ付けて、血液を凝固させます。

低分子医薬品と抗体医薬品の特徴

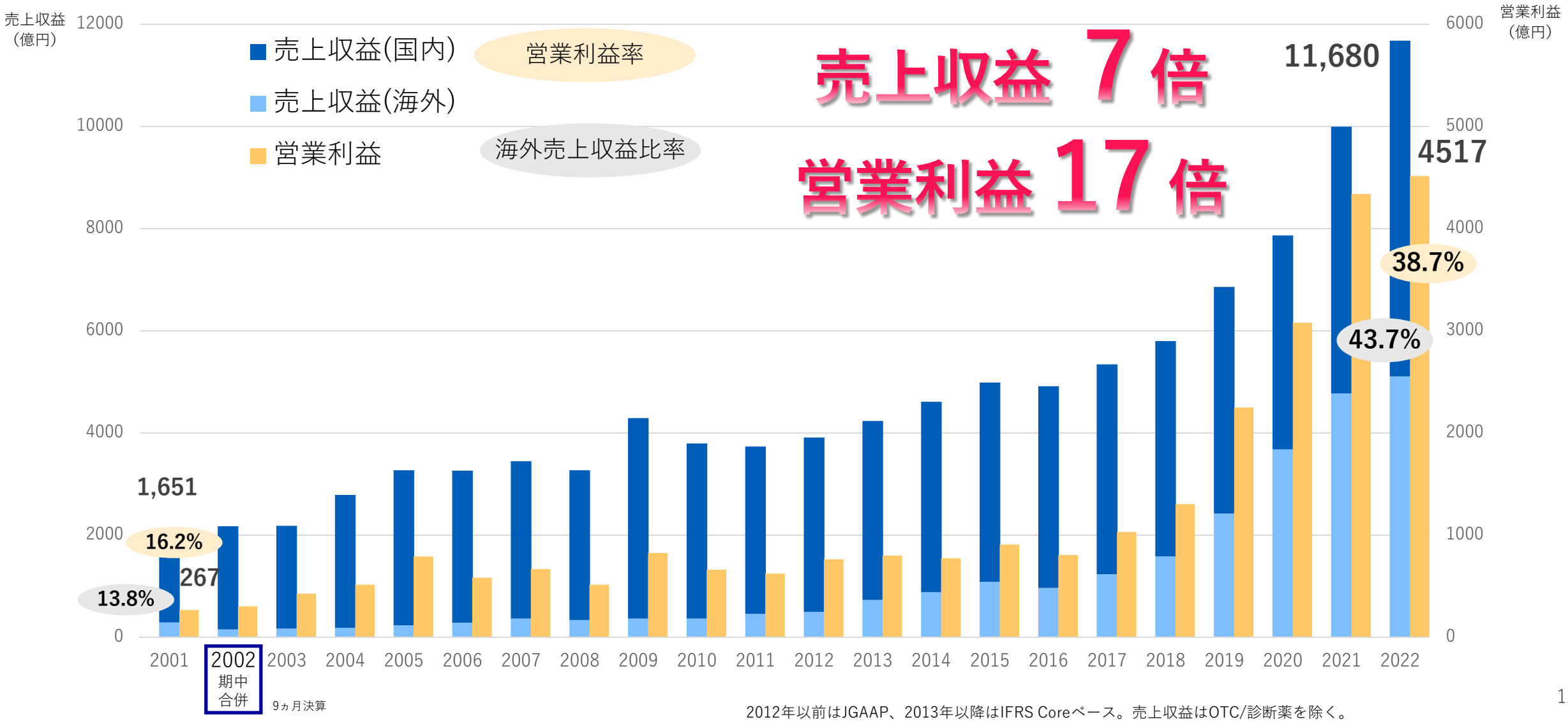
	低分子医薬品	抗体医薬品
大きさ（分子量）	小さい（多くは500以下）	大きい（数万～数十万）
製造法	化学合成	細胞の中で生産
体の中に留まる時間（血中半減期）	短い（数時間～数日程度）	長い（数週間程度）
特定の物質のみ反応する性質（標的特異性）	△	◎

新たな創薬モダリティ、中分子への展開

- 低分子医薬品と抗体医薬品の利点を兼ね備えるのが**中分子医薬品**です
- これまで狙うことが難しいとされた標的にもアプローチが可能とされています

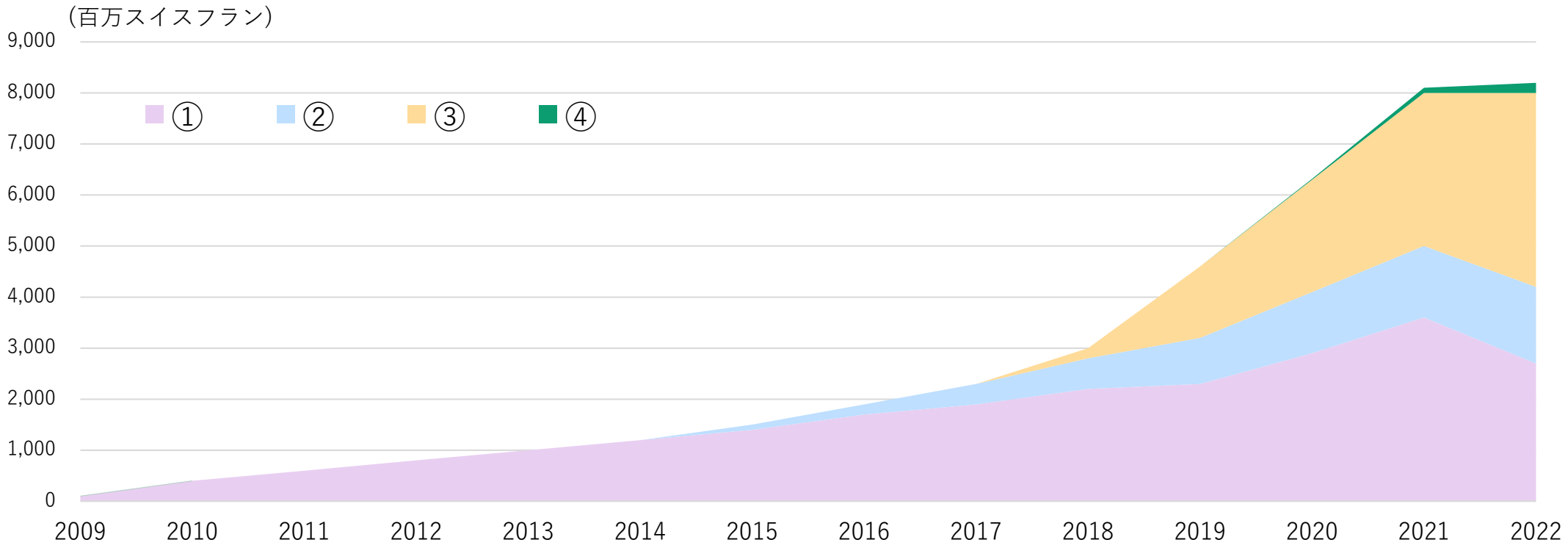
	低分子	中分子	抗体（高分子）
分子量	500以下	**500～2,000**	10,000以上
投与経路	経口／注射 	**経口／注射** 	注射
標的特異性	△		

戦略的アライアンス以降の成長



2012年以前はJGAAP、2013年以降はIFRS Coreベース。売上収益はOTC/診断薬を除く。

自社創製品の世界売上高



ヒト化抗ヒトIL-6レセプターモノクローナル抗体 ①

- 日本初の抗体医薬品
- 適応症：関節リウマチなど
- 全世界で売上3,000億円以上

ALK阻害剤 ②

- 当社が推進する個別化医療の代表例
- 適応症：ALK陽性 肺がん など
- 1次治療の承認取得（日/米/欧）
- 全世界で売上1,500億円以上

抗血液凝固第IXa／X因子ヒト化二重特異性モノクローナル抗体 ③

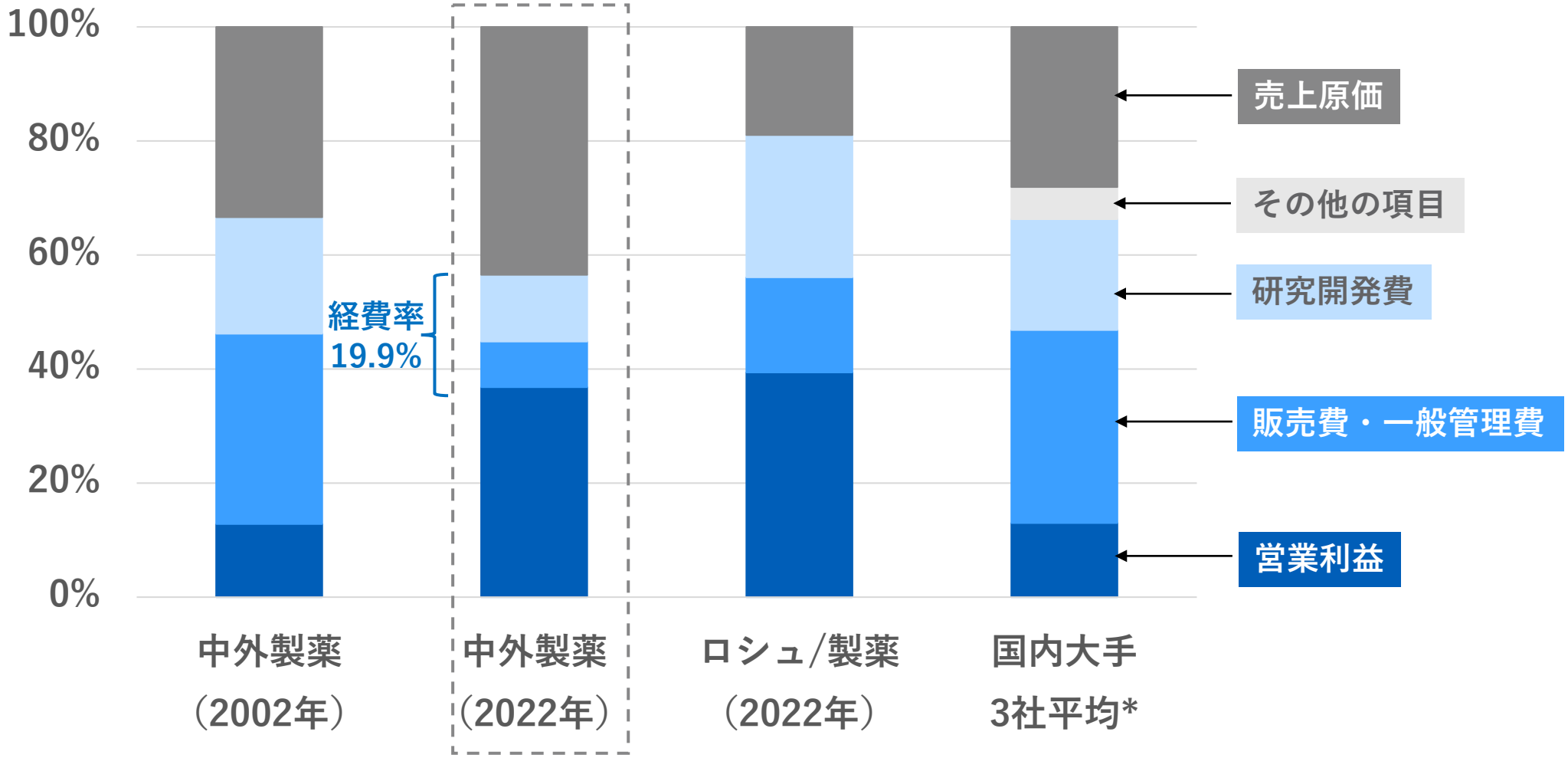
- 独自の抗体技術を活用
- 適応症：血友病A
- 全世界で売上5,000億円以上

pH依存的結合性ヒト化抗IL-6レセプターモノクローナル抗体

- 独自の抗体技術を活用
- 適応症：視神経脊髄炎スペクトラム障害 ④

独自のビジネスモデルが示す収益構造の特徴

■ 当社の営業利益率は、約40%と高い収益性を実現



＊医療用医薬品の国内上場製薬企業、上位3社の平均（武田薬品工業、アステラス製薬、第一三共）。各社2022年3月期決算資料より

医薬品研究開発のプロセスと費用

■ **開発コストの約半分を占める後期開発（第II/III相）をロシュ社に任せ、中外製薬は研究～早期開発に集中投資が可能**

製薬企業の研究開発費の内訳

	研究		開発		
	創薬	非臨床	第I相	第II相	第III相
開発コスト 米国製薬企業 2021年実績	23.0%		14.0%	18.0%	**45.0%**
自社創製品の開発費用負担	中外		中外→ロシュ ※ヒトで安全性・初期有効性の確認後に導出		ロシュ ※日本での開発費用は中外が負担

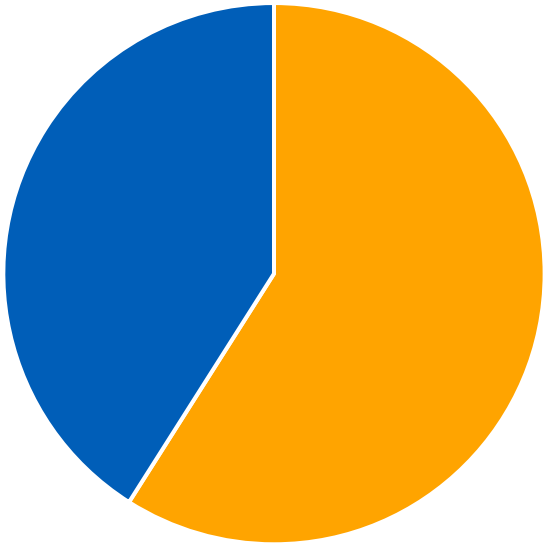
出所：PhRMA Annual Membership Survey、出典：日本製薬工業協会 DATA BOOK 2023

独自のビジネスモデルが示す収益構造の特徴

■ 自社創製・ロシュ導入と、品目特性に応じ適切な資源配分を実現

ロシュ導入品（41%）

研究費：　　ー
開発費：★　　早期開発はロシュ
販売費：★　　国内のみ
原　価：★★　ロシュから輸入



売上収益構成比（2022年）

自社創製品（59%）

研究費：★★★　集中投資
開発費：★　　海外後期開発は導出
販売費：★　　国内ほか一部の国のみ
原　価：★　　一定水準

2030年トップイノベーター像実現に向けた新成長戦略

CHUGAI
Roche ロシュ グループ

『R&Dアウトプット 倍増』・『自社グローバル品 毎年上市』

世界最高水準の創薬実現

- ▶ 独自の創薬アイディアを具現化する既存技術基盤の拡張と新規技術基盤の構築
- ▶ R&Dアウトプット倍増により毎年自社グローバル品上市
- ▶ デジタル活用およびグローバル先進プレーヤーとの連携強化によるイノベーション機会の加速

先進的事業モデルの構築

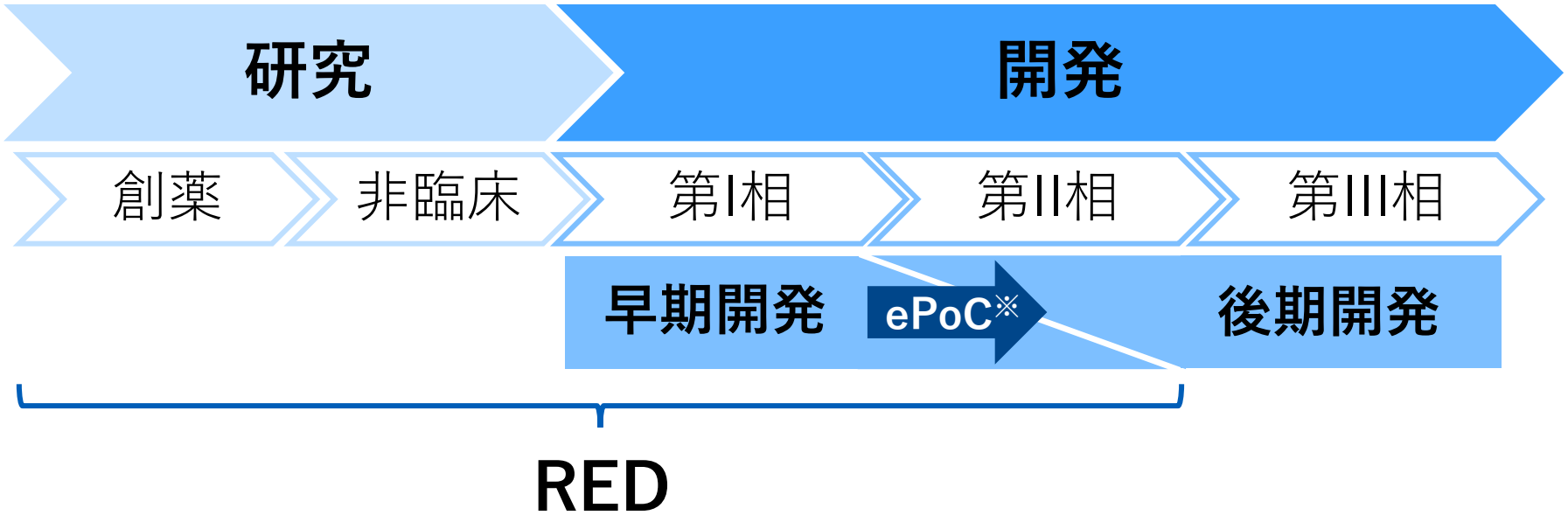
- ▶ デジタルを核としたモデル再構築による患者価値・製品価値の飛躍的向上
- ▶ バリューチェーン全体にわたる生産性の飛躍的向上
- ▶ 医薬品の価値最大化と収益の柱を目指したインサイトビジネスの事業化

Key Drivers ▶**DX** ▶**RED SHIFT** ▶**Open Innovation**

＊RED：Research（研究）とEarly Development（早期開発）の総称

医薬品研究開発のプロセス

■ RED：Research（研究）とEarly Development（早期開発）の総称

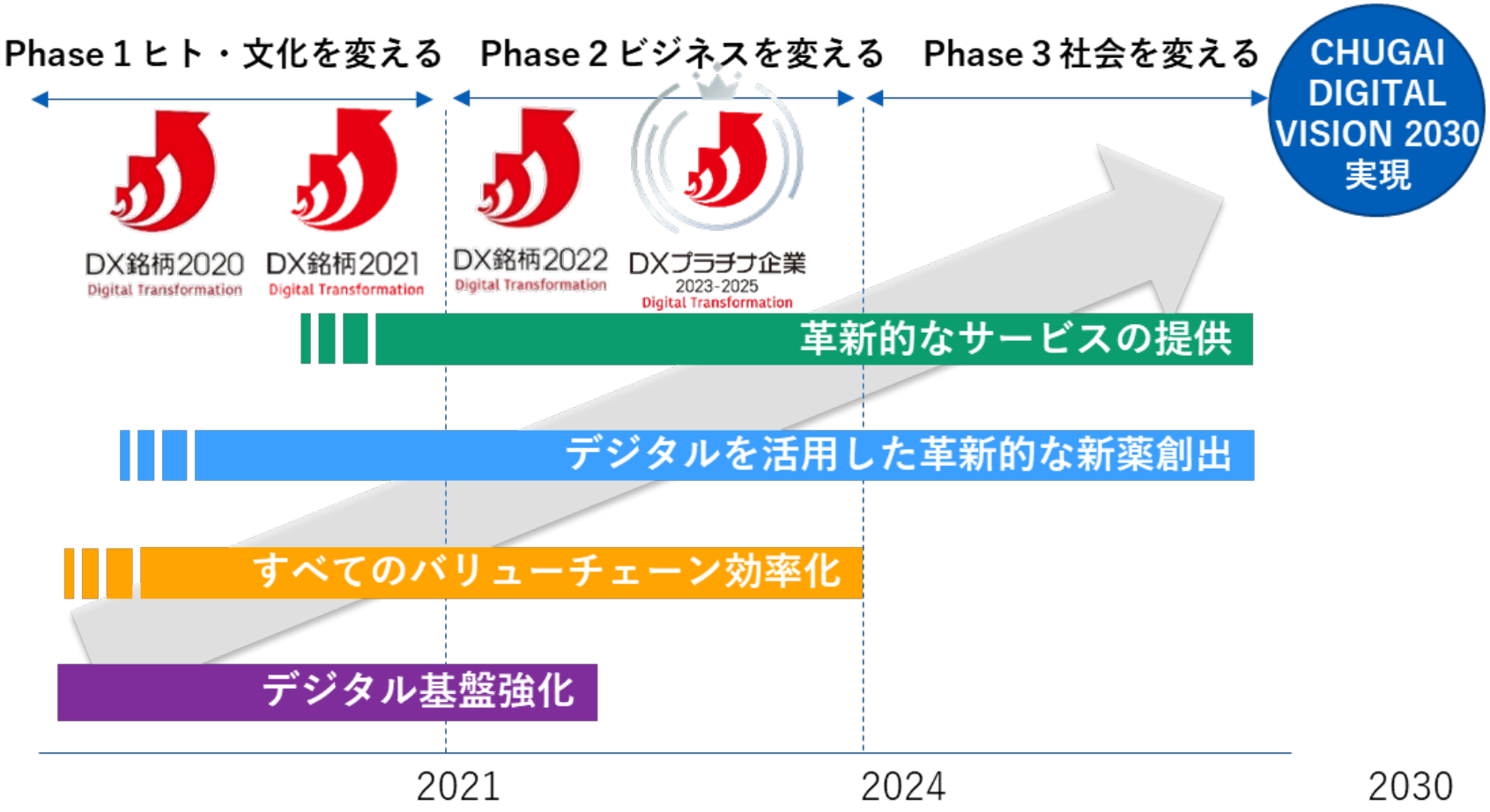


RED機能に経営資源を集中させ、価値創造の源泉である創薬から PoC取得までの機能を強化し、R&Dアウトプットの向上を図る

※ePoC（early Proof of Concept）：限られた例数で、安全性に加え、有効性の兆候または薬理作用が確認されること

DX銘柄・グランプリの受賞

- DXに対する取り組みが評価され、DX銘柄*の「DXプラチナ企業2023-2025」に選定
- 「CHUGAI DIGITAL VISION 2030」の実現に向け、引き続き全社で取り組みを推進

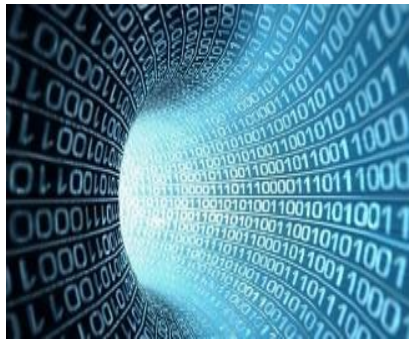


* 日本企業のDXを加速することを目的に、経済産業省と東京証券取引所が共同で選定

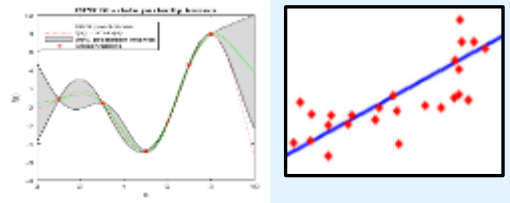
創薬におけるデジタル活用事例（抗体×AI）MALEXA®

MALEXA®（マレキサ）：Machine Learning x Antibody

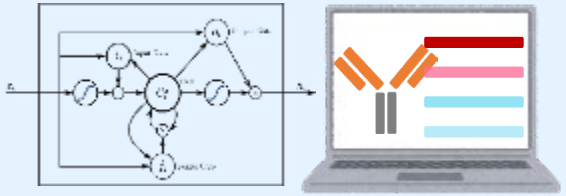
多様な抗体の
特性データ



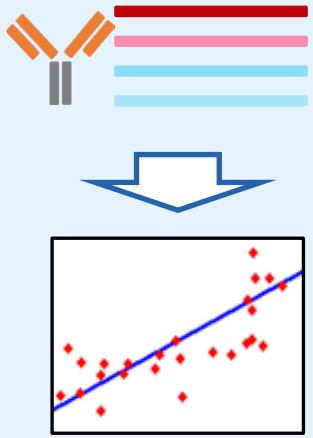
予測モデル



抗体配列の生成



**AIによる
開発候補提案**

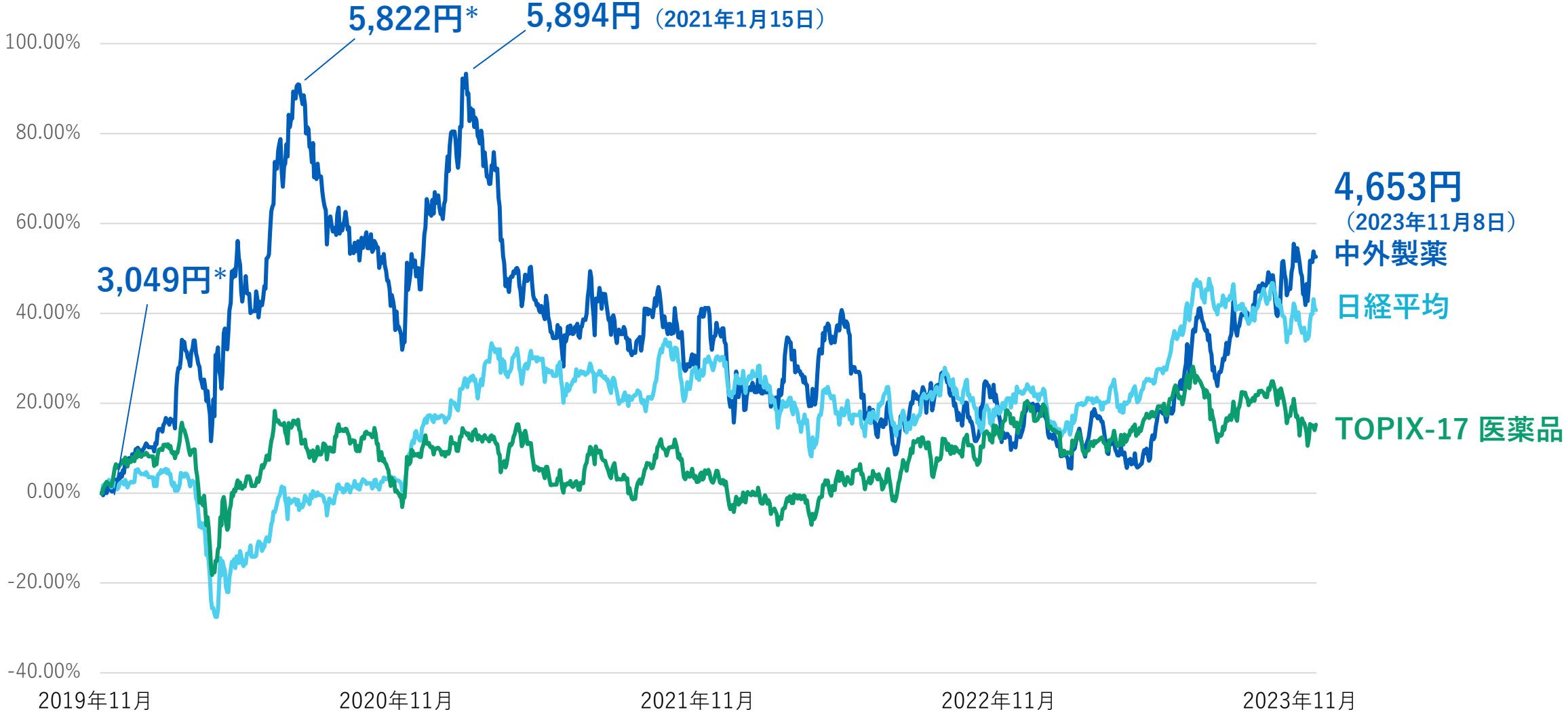


研究者による
評価・判断

← 実験 →　← **AI** →　← 実験 →

- ✓ 新規配列の予測結果を実験に提案
- ✓ 試行錯誤のスピードアップとイノベーションの確率上昇が期待

株価推移（終値）

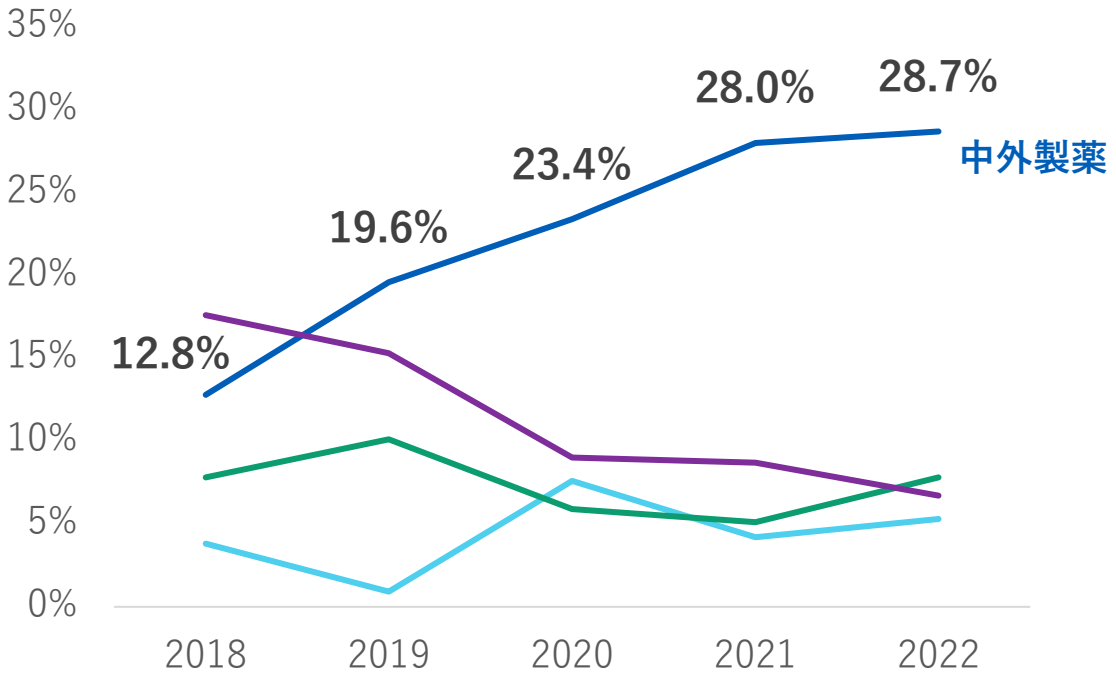


*：2020年7月1日を効力発生日として普通株式を1株につき3株の割合で株式分割を行った
2020年6月30日以前の株価は、当該株式分割が行われたと仮定して算出

財務指標でみる中外製薬

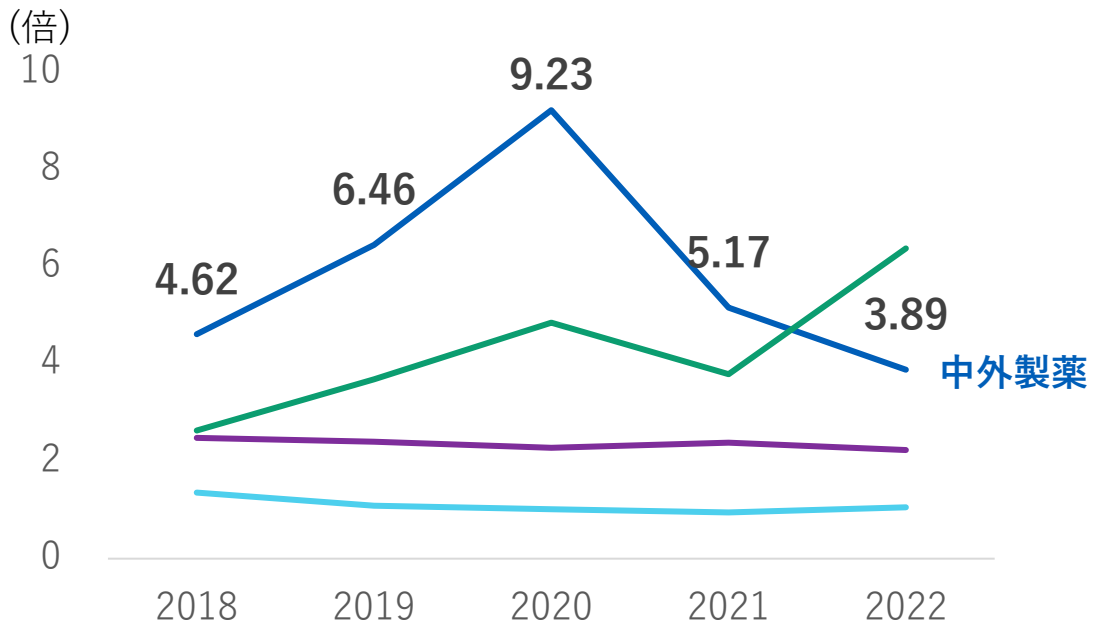
収益性指標（ROE）

株主資本に対する当期純利益の割合
＝当社の株主持分当期利益
　／当社の株主に帰属する持分



株価指標（PBR）

株価純資産倍率
＝期末株価／一株当たり当社株主帰属持分



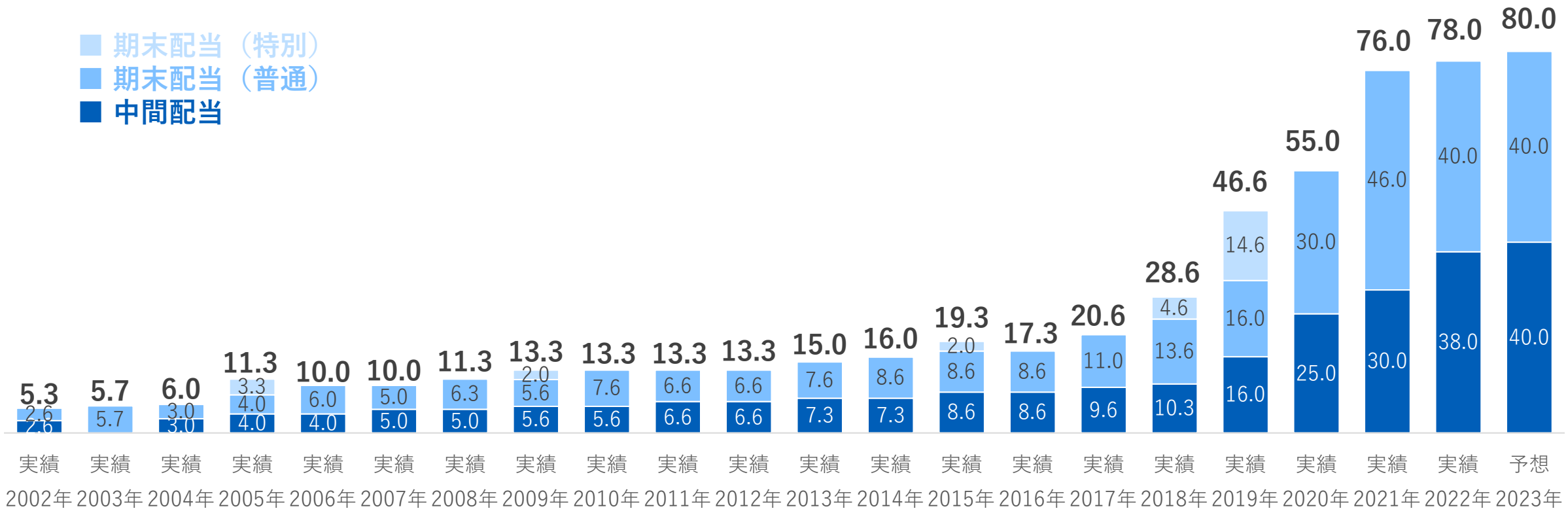
中外製薬、医療用医薬品の国内上場製薬企業、上位3社（武田薬品工業、アステラス製薬、第一三共）。各社決算資料および期末株価より算出

株式の基本情報

■ 単元株：100株　　■ 証券コード：4519（東証プライム市場）■株主優待：なし

■ 利益配分に関する基本方針

戦略的な投資資金需要や業績見通しを勘案した上で、Core EPS対比**平均45%の配当性向を目処に、安定的な配当**を行うことを目標とします。



2003年は9カ月決算のため、1年間の割合で算出
2020年7月1日を効力発生日として、普通株式を1株につき3株の割合で株式分割を行った。2019年以前は、期首に株式分割が行われたと仮定して算出

お問い合わせ先

広報IR部 インベスターリレーションズグループ	
Tel：	03-3273-0554
E-mail：	ir@chugai-pharm.co.jp
担当：	櫻井、島村、横山、吉村、山田、池ケ谷

創造で、想像を超える。